

質疑・討論

(菊間) どうもありがとうございました。報告の順で質疑応答に移りたいと思います。

議論の参考として簡単に触れたいことがいくつかあります。1つは92年の地球環境サミットのときにエルンスト・ワイツゼッカーという人が、資本の側は社会的に必要な仕事の中から儲けの対象になるものだけを雇用に結びつけるが、社会的に雇用に結びつかないものがいくらでもある、とっています。例えば教育・福祉・環境・医療すべてそうですね。しかし市場原理にゆだねたならば残りのワークの部分はレイバーにはならない。富田さんの言葉では「労働の人間化」をしていくという大きな課題が1点あると思います。

もうひとつは「ハピタット」(国連人間居住会議)という居住問題を扱うセッションがあって、96年だと思いますがトルコのイスタンブールで2回目の会議を開きました。ここでは、人間にとって一番大切な環境問題、足の下にあるような環境問題は居住問題だと言っています。居住の問題を解決するときに国家の役割にずいぶん期待してきましたが20年経ってみると国家はあまりやっていない。改めてこの問題を解決するイニシアチブをもっているのは小規模地方自治体、日本流に言えば市町村である、それから協同組合であると言っています。そういうものが、地域の農業、林業と雇用と居住の問題を一緒に考えていく、まさに「地球の裏側から木材を持ってきて家を建てるようなことはやめなさい」「地域にあるもので家を建てなさい」「それは食べることと同じです」そういうことを言ったんですね。ですから、居住の問題を解決しながら雇用の問題も解決しなさいまちづくりもしなさいという宣言をしました。これは21世紀の国連の柱となる活動ではないかという高い評価を受けた宣言でありました。そういう中で雇用の問題を考える必要があるのではないかと私は思っています。

以上は余計な話ではありますがまず最初の竹内さんの報告について参加された方の中からご意見ご質問を承りたいと思います。わざわざ東京から森林組合の関係ということであらしゃった方がいます。

全森連の比嘉さんがいらしゃったので感想意見ありましたらお願いします。

全国で現在1010くらいの森林組合があります。今日発言のあった森林組合は全国的にはかなり優秀な森林組合ということは間違いありません。そこで参事のところにはパンフがありますよにかなり山での仕事を商品化して消費者に結びつける話とか交流をしているということですので、パンフの紹介を兼ねて、市民に向かってどんな活動をしているのか、逆に今までの活動が山にどういう風にフィードバックしているのかということをお皆さんに紹介していただけないかなと思います。

(竹内) 具体的なことを言えば、5、6年前までですね、「マスコミの方には言ったってわかんねえんだ」というような偏屈がございまして、あまり説明をしていませんでした。しかしよく考えてみますと自分で言うのも変なんですけども、涙ぐましい努力をしているんですね、市民の皆さんにどうしてもそれを是非見てもらった方がいいと思い、NHKにも以前は絶対行かなかったんですが「早く取材をしろ」というような半分脅迫的なこともしました(笑)。

交流の中身なんですが、ひとつは市民の皆さんの前に大学の先生・学生にも来ていただいて山の勉強をしてもらったりして、それだけではどうも足りないということで、昔ながらの炭焼きなどの「体験シリーズ」をしました。機械ではなく昔ながらの土窯です。窯をつくるのに100万円かかります。12月から炭焼き体験の募集をしましたが、忙しいし寒いし誰も来ないのではと思っていましたら、仙台市民の方を中心に60名も、じいちゃんばあちゃん、子供さん、若い人などさまざまな方が集まりました。炭焼き体験は2回行いました。

今、われわれは市民の方と一緒に納豆作りをしています。豆とかも安いんですね、木材だけではないんです。納豆はとても上手にできます。森林組合は納豆屋をはじめるのかと誤解されるんですが、ただ山に木を植え、丸太を売るのが森林組合ではなくて、納豆、豆腐をつくるにも道具は木材があるので、そうした原点に戻ってそういう活動をしていきたい。うちの方では鶏・合鴨・鳥骨鶏(うこっけ

い) ヤギも飼っています。牛は飼っていませんけど、市民公園にお客さん来ませんからそこを畑にして野菜を植えて、みな作っています。キャンプ場に野菜を作るとなんだか戦時中のようなと言われることもあるんですが、山の頂上は非常にミネラルを含んだ赤い土で、ヤギや鶏の堆肥をいれて化学肥料をつかわずに野菜を作っています。河北新報さんから露天商の話が出ましたが、われわれも長崎屋さんの前にテントを張って毎年4月から12月までは露天商をやっています。そこでは農家の奥さんたちが作った野菜・米、私たちのキノコ・山野草とかいろいろなものをもってきます。最初は1日に5、6万しか買ってもらえなかったんですが、去年からは30万にもなっています。1個100円200円のもので、是非そのうち荒町商店街に殴り込みをかけたいなと思っています(笑)。

行政に頼らなければならぬ部分もありますが、行政の企画したイベントに出店しますと1日2、3万でぜんぜん合わないんですよ。いかに駄目な企画しかできないかですね。国民の税金を使わなくても市民の皆さんには30万も売れるんです。それで答えになったかわかりませんが、うそだと思ったら来て買ってみてください。やっていますから。

(菊間) どうもありがとうございます。竹内さんからエールをおくられた出雲さんの話に移りたいんですけど、出雲さんの話でご意見ご質問ありますでしょうか。山形の鶴岡から何名かみえていますので、お願いします。

鶴岡における商店街も相当下火になっているものだと、そうとうとうすじがなくなっているな、閉鎖した商店街が多いなと思っています。仙台の荒町商店街というのは存じ上げなかったんですが、今どういう状況になっているのか、町によってはしなびてくる、活気のない商店街が多くなっているのではと思っています。そこは私も市民の力で復活させる運動を行わなくてはいけないと思っています。

では、荒町商店街の方に。巢鴨の方ですか、高齢者の方をターゲットにしていると。先ほど富田さんが構想はできているということなんですが、荒町の方々の高齢者をターゲットにした商売、鶴岡も同じ

なんです。先ほど言ったように非常に寂れています。わたしも日曜ふらっとでますけどほとんど人通りがない。日曜ですよ。そういう状況でこれは本当にたいへんだな、と考えているわけですが、その辺をお聞かせいただきたい。

それから先ほどの森林組合ですね、これ非常に大事なんですけども質問したいのですが、国の林業政策が大転換して対応に苦慮していると。もうちょっと具体的に森林組合の方がどういうことを望んでいるのか、市民の方が参加しながら緑化運動には参加できないのか、この辺の糸口をお聞かせいただけるとありがたいなと思います。

(菊間) 最初に出雲さんご返答お願いします。その後で、竹内さんご返答お願いします。出雲さんお願いします。

(出雲) 今商店街は「時代の遺物」になりつつあるといった感じですが、仙台は逆に全国的に見てもにぎやかで、福島・郡山・山形市・庄内ガールズといって、長距離バスで仙台まで買出しに来るようで、東北地方の購買を集めて「独り勝ち」をして恵まれているらしいです。私も仙台の商店街の副会長をしている兼ね合いで石巻や県内各地をまわると、見るも無残で開いている店を探さうが大変です。町が壊れてきているという状態です。是非皆さんにこの辺の問題意識を持っていただきたいと思っています。皆さん買い物といえばスーパー、大型店に行っていると思うんですね。私すらそうですから、商店で買い物をするということが自体がなくなっていると思います。われわれもただ商店街で物を買ってください、大型店反対といっている時代は終わったんだと思います。単に補助金頼みでなんかの活性化の補助金とかをたよりにしていると、それを私は「香典」というんですが、香典もらって商店街が死ぬのを待っているだけなんだ、無駄な努力をしているだけなんだという気がします。ですから、最後のチャンスという何かやらなくてはと思っています。大型店対商店街という構図は終わってしまっていて、大型店が外国から来る大型店にどう対抗していくかという時代になっています。「ビブレ」がつぶれたりとか、ある日突然大型店がなくなるといった状態がすでに各地で起こっているわけです。お客さん、特に老人が

買いに行く店がないというのは一種の社会問題ではないかと思うんですね。

これから IT の時代になるそうですね。パソコンで物を買うというときに、お店って本当に必要なかなと原点を問われていると思います。これはわれわれの問題、店に買いに来るお客さんの問題でもあります。解決策は何もないなという、何もないんですが、われわれだけの発想では前に進まないわけで、高齢協さんとお年寄りをターゲットにしたことをやっていこうなど、外の力を借りながら新しいチャレンジをしていこうと思っています。お年寄りという介護保険など具合の悪いお年寄りのために何とかしなきゃいけないという感じだったんですが、元気なお年寄りが増えてきますので、そういう人たちが何かをしてもらうだけではなくて、そういう人たちが商店街と一緒に新しい事業を起こせたらいいなと思います。

あとは、もっといろいろなネットワークを利用してせっかく今日、竹内さんとお友達になれたので、殴り込みというか、商店街で登米のものを売ってもらうと、そうすればお客さんが来て活性化する。商店街でそういうことをすると地元の商店が文句をいうんですね。「うちで八百屋やっているのに何で大根持ってきて売らんだ」とか。実際そういうことがあるんですけど、そういうのはやめにしたいた。やっぱり前向きにやっていかないとお客さんはついてこないと思います。われわれとしては形に見えるものを一つ一つ積み重ねて、ほかでやってないことをあきらめないでどんどん、やっていこうと思います。

(菊間) どうもありがとうございます。参考にといいことでお話ししますが、秋田のある地方銀行の労働組合が、今から 10 年以上前のことですが「中小企業倒産防止条例」という大変面白い要求を市町村に対してしたんです。簡単に言うと商店街、中小企業が不景気になったとき無担保無利子で運転資金をお貸ししますというようなものを作れという要求です。その原初はどこかというのは銀行労働者の労働組合でして、大変ユニークで皆さんが銀行に口座をつくって知らずに放置すると何年かたつと銀行のほうにお金が入りますね。口座ごと没収されて、あの金額は結構な金額になるんだそうです。それを元手に

して、もともと他人の金ですから、銀行が地元に戻すのは当然であるそれを市町村を通して返せというそういう要求です。皆さんに関心があれば資料持っていますのであとでご紹介できると思います。

それでは、先ほどの竹内さんの質問に対する返答をお願いします。

(竹内) では、簡単に答えます。国の政策の転換に苦労したということですが、森林組合は今まで木材供給、森林造成など国家的なひとつの政策で「親方日の丸」的なことでやってきました。急に「きれいな水が出る森を作る」「環境保全に配慮して保健休養の場でもある」といった国民の多様なニーズ、期待に応える政策転換がなされたわけで、ここに全森連の方がおりますが、まだまだ森林組合は私を含めて体質が古いものですから、そういう政策転換に対応できる森林組合は少ないのではないかと思います。

私たちも 10 年前からこのことに取り組んでおりますが、はっきり申し上げて苦しいわけです。しかしまだ死ぬことを考えるのはまだ早いわけですし、生き延びることではなく、真剣に生き抜くことを考えています。そのために皆さんと一緒にやりたいなと。余計な話なんですけど、うちの方にも大型店「ジャスコ」ができております。しかしうちの町の八百屋がジャスコの前で露店を開いたんです。そうしたらその八百屋さんはたくさん売れるんですね。登米の三越にもこの間聞きましたが、最初は露天商から始まったそうで、最初からデパートを立てた店はないそうです。大きくなれば恐竜が絶滅したみたいに潰れるだけなんです。

それからうちの町の店でも、豆腐・油揚げ・油麩・せんべい・餡とかまんじゅうをつくっているところは苦しくても生き残っております。人のものを売っているところはシャッターを閉めています。あまり立派なシャッターは作らないほうがいいのではないかと思います。以上です。

(菊間) どうもありがとうございました。必要なら戻りますが、岩瀬さんの報告に対してご意見、ご質問、感想など受けたいと思います。竹内さんの話とかかってくるんですがいかがでしょうか。

紹介に「スローフード」のこともやってらっしゃるということで、その辺の話をもうすこし。

(岩瀬)「スローフード」というのはイタリアでずいぶん取り組まれていた「ファーストフード」に対する反語だと理解したほうがいいでしょうね。でもその理解は正確ではありません。スローフードというのはもともと家庭料理でして、お母さんが材料を吟味して、時間をかけて煮込んだり炒めたりしたものを、ワインを飲みながら、チーズを食べながら2時間、3時間、団欒しながら味わうという考え方だと思います。イタリアでスローフードをやっている町では露店のようなところで券を発行して、イタリアの家庭の田舎のゆっくりした気分で、安全な自分たちで作った食事を味わってほしいということで、毎年世界から人が集まっています。その料理というのはその地域の野菜なだけけれども、他の地域では絶滅したり栽培していない野菜もあるんですね。そういうものをスローフード協会が指定して、栽培を続けていくように食の系統もきちんと押さえていこうと。そういう意味では自然に非常に近い食の運動だと思います。

私は気仙沼にいて、ソムリエ協会の副理事長がたまたま尋ねてきまして、その方からいろいろスローフードの運動はとにかく大事なんだと教えていただきました。ファーストフードを否定するわけではないけども、ただBSE以来ファーストフードの原材料が大変なんですね。食の安全と家庭の団欒とですね、そのなかから出てくる食事が大事なんだと。そこで米粒が神様みたいなものだと言うつもりはありませんが、やはり食に対する理解ですとか、家庭の中の人間関係が再構築されてくる、われわれが急速に失っているものがそこで補われるのではないかと。

気仙沼でもそういう意味で遠洋漁業の拠点の港があります。食材は自分たちで外洋から採ってきますから遠洋マグロを国産マグロといっていますが、いろんな食材があります。それを生かして気仙沼のシャッター街をなんとかして立ちなおさせようと、食と教育の取り組みをなんとかやれないかと仕掛けをやってきて、辞令をもらってこっちへ帰ってきてしまったんです(笑)。これを何とか仙台で生かせないかと、いうのがあります。

ただ、今、緊急には、露店という部分のパワーを何とか発揮できないかしらと思っていて、そこから

考えるとスローフードは少し先だよと。ただ、高い志をもって食の復活というかそれを仙台で考えていきたいと思います。やっぱり、「におい・香り」のない街はすぐ死んでしまうんですね。「ああこの仙台の町の一番町のあの角はソースのにおいがしたなあ」などと人間の記憶に残るのはにおい・香りなんです。ですから、仙台が焼け野原から立ち上がった露店のパワーというのをもう一度思い出して何とかしたいなあ。で、状況が少しよくなってきたらスローフードの話に持っていかれたらと思います。

もう一つ私、出雲さんのほうからよこされたんで、竹内さん、仕返しをしようと思うんですが、前段で都市部といたたので、こんどは農村部、郡部のほうで、どういうことができるかということでお尋ねしたいんですが、100万円程する窯なんですけど、これは竹炭なんかと一緒に焼けるんですか？まずお尋ねします。

(竹内)竹炭ですが、これは温度が高いんで窯を痛める可能性があります、節を抜いて焼けば大丈夫です。竹も焼いてます。非常にいいものができます。鉄窯とかいろいろあるんですが、やっぱり土窯で焼くのが一番いいみたいですね。

(岩瀬)これをお尋ねしたのはですね、仙台七夕祭り、出雲さんの所も何百本と竹が出てくる、ですが、祭りが終わるとみなゴミになるんです。たまには秋のお彼岸の竹のあれに使うんですが、仙台市の清掃局も大変困っているんですね。でも8月の七夕には仙台市内全部、荒町も含めて最低2000本からそこらはでる。それを灰にする前に炭や竹酢酸で生かすことはできないかと考えています。そういう部分で少しリサイクルと仕事の部分をうまく組み合わせることはできないかなと思うんです。竹を割って豆腐をながすと「竹豆腐」とか、さっき節といいましたが節を生かして「かつぼう酒」というのもできるんですよ。そういうことで仙台の祭りが終わった後も余韻を楽しめるような仕掛けが、今日ここでお会いした竹内さんのような異業種の方との出会い通じて生まれてくるのではないかと、いろいろなアイディアが生まれてくれば何か仕事が見えてくるのではないかと。そのような機会になればいいなと思います。

(菊間)時間も迫ってきましたので、富田さんのご報告について意見、ご質問等受けたいと思います。よろしくをお願いします。

仕事おこしのグループの設立を考えております。簡易な法人取得を考えておまして、NPO法人か企業組合か協同労働の協同組合化の3つくらいの取得の方法を模索しています。この3者の違いはどういうものとお考えなのか、また、特徴というのはどういうものか教えていただけるとありがたいと思います。

(菊間)富田さんお願いします。

(富田)時間がおしていますのであまり詳しくはお話しはできないんですが、私たちの協同労働の協同組合の法制化の内容はこちらのパンフに記載したもので参照していただき、わからないことがあれば後でご質問でお寄せいただければとおもいます。非営利・協同ということで働き方を貫くとすれば私たちが求めている、協同労働の協同組合の法制化が必要なのですが、現状ではないという制約から、市民の皆さんが事業活動に携わる場合に中小企業等協同組合に基づく企業組合の法人や、今お話のあった特定非営利活動促進法、NPO法を利用されています。それぞれ企業組合法人もNPO法人もいろいろな限界があって、今十分な時間がないのでお話できないんですが、やはり市民が自立的に非営利の事業として取り組むとすれば私たちが提唱している協同労働の協同組合法がもっともふさわしいのではないかと確信しておりますので、その点だけ申し上げておきたいと思います。以上です。

(菊間)そろそろ時間が迫ってきましたので、これはあえて総括はしないで、去年ここにいる富田さんを一緒に含めて4人で行った韓国のMFNというんですが、「フォレストフォーライフ」という生命の森運動という話をしたいと思います。

韓国は90年代に非常な財政赤字に陥りましてIMFからの借款ということで財政建て直しを進めました。IMFの勧告もありまして国家機構をいろいろ変えて、林業関係でいいますと日本の林野庁に相当する山林省というのが扱っている造林補助金を

全部吸い上げたんです。吸い上げて若い人たちが山村で造林の仕事をしながら雇用に当たるという方針に変えて4年間やりました。環境と雇用の問題の解決を若い人のイニシアチブですということをやったんですね、これは富田さんを含めて4人で調査に行きましたが、大変面白いことが判りました。

ひとつは、フォレストフォーライフの人たちは山の仕事だけをやっているわけではないんです。これは本人だけではなく、例えば奥さんが独居老人の食材の供給をしたり、介護もする。他の仕事も含めて全部するんですね。山の仕事だけだと冬の間はできないので、年間通して家族でいろいろな仕事をしながら、そういうものを作っていくというやり方です。その仕事を広げるために作ったものが「自活支援センター」、簡単に言えば自分たちの銀行みたいなものです。地方自治体なども金を入れて銀行を作ってそれを投資会社にして新しい仕事をおこしていくということをやりました。ですから韓国の人と話しをしたときに「30年代40年代のアメリカはニューディール政策で環境を壊しながら雇用の確保をしたんですが、あなたたちの活動は環境を保護しながら雇用を確保する運動ですか」と言ったら、「まさにそのとおりだ」と言うんですね。雇用の問題と環境の問題を狭い枠の中で考えてなくて私たちもずいぶん感銘を受けて帰ってきました。

雇用と環境、まちづくり、仕事おこしの問題が一体であるということが非常に大事であるということを改めて4人の方のお話を聞いて、山際先生のお話を聞いてよくわかった次第であります。もう少し時間があればまちづくりのグランドプランというか地域計画をどう作っていくか住宅、建築、設計の話もしたかったんですが、残念ですが時間がありませんので皆さん職場や現場に戻られて今日の方々の話を参考にしながらもう少し具体的なものを造っていただけるとということで私の挨拶とさせていただきます。

時代の変化とともにみんなで生き方を考えていく、実際に取り組んでいくということの重要性を私自身今回のシンポジウムで感じましたので、自分たちの地域の活性化には他人事ではなくて自分のことととらえまして全力で取り組んでいくようにがんばりたいと思います。今日は本当にありがとうございます。